

## No.20 胴体分業

剣の名人に辻斬りされた風呂屋の主人。あまりスパッと切られたので死にもせず働いていた。しかし、一日中番台に座っているのに下半身は不要。そこで、脚の方はこんにやく屋に奉公に出した。こんにやく屋では過酷な蒟蒻の踏み潰し作業に、脇見もしないでよく働くと大評判。

風呂屋の客「明日、こんにやく屋に行くが何かことづけは有るかい？」

風呂屋の主人「それならあいつに言ってくださいえ。近頃、目が疲れてしょうがねえんで、たまにゃあ三里に灸をすえてくれろってね」

風呂屋の客が、こんにやく屋の仕事場に行ってみると、なるほど評判どおり脚が黙々と蒟蒻踏みをやっている。みればねじりはちまきだ。

客「精が出るねえ、ねじりはちまきかい？」

脚「いやあ、こりゃ禪ですわ」

客「なるほど、ちげえねえ。真ん中あたりが少し黄色くなっていらあ。ところで胴体の方から頼まれたんだがね、眼精が疲れるんでたまには三里に灸をすえてくれと言ってたよ」



脚「分かりやした。こっちからも言ってくださいえ。あまり、お茶を飲まねえようって。小便がちかくって仕事に差し支えるからってね」